

日本の歴史 43

『地図で読む『古事記』『日本書紀』』

武光誠著 (PHP 研究所 PHP 文庫 2011)

本書の請求記号 210.3 Tak

稲垣宏行

『古事記』『日本書紀』は現存する日本最古の歴史書です。日本古代史に造詣がある大学教授の著者は地図を交えて、二つの書物で描かれる登場人物たちが辿った進路、各地方あるいは国土上における勢力争いなど歴史上の真相を描写しています。3、4世紀に現在の奈良に建てられた大型の箸墓古墳や、同地の纏向遺跡で発見された土器が広範囲に分布している図は、大和朝廷の勢力が急速に拡大していったことを物語っていると著者は考えています。

日本神話の部にも当時の歴史的背景や意味が存在します。例えば、「国生み(日本列島の創造)」で生まれた島々は西日本に集中しています。著者はこれを大和朝廷、当時の支配者の力が東日本にまで及んでいなかったからだとして述べています。大国主命おおくにぬしのみことから天照大神あまてらすおみかみへの「国譲り(最高神の地位の交代)」も、天皇家が豪族たちの上に立ったことの暗示です。天照大神は天皇家の祖神で、大国主命は豪族たちに崇められていたからです。そしてこの時期は、6世紀初めの継体天皇の時代に当たると著者は指摘します。

『古事記』『日本書紀』は奈良時代の同時期に編纂されました。共に神話の時代から始まり、記述も天皇家の日本統治を正当化する意図に基づいています。また、超人的な腕力ゆえに周囲に恐れられ遠ざけられた皇子、日本武尊やまとたけるのみことなどに見られる貴種流離譚(貴人が何らかのきっかけで不遇な立場になって遠方をさすらう物語)が多い点も共通しています。しかし、それ以外には明らかな違いが見られます。全3巻の『古事記』に対し、『日本書紀』はその10倍の全30巻で成り立っています。また『古事記』が神話を重視した歴史描写であるのに対し、『日本書紀』は中国思想の影響を受けており、歴史描写も神話的な部分があるものの、中国の歴史書に基づいた現実的なものです。例えば「物言わぬ王子ほむつわけのみこと」蒼津別命の話では『日本書紀』は単に、白鳥が飛ぶ姿を見て言葉が話せるようになった

と記しただけですが、『古事記』はそれに加えて、大国主命のお告げに従い出雲大社を建てたことで話せるようになったとしており、神への信仰に重点が置かれています。

日本神話に影響を及ぼした「バナナ型神話(人間が石よりバナナを好んだので、果実のように短命になった話)」「他界妻(人と異なる別世界の生き物であると知らずに結婚してしまった話)」などの流布あるいは分布の図も重要です。「バナナ型神話」は東南アジアやニューギニアに多く分布し、「他界妻」はペルシアから伝わったものです。大昔から日本には遠く離れた国々の影響があったことを示す興味深い事例です。

日本古代史には、現代に至っても、まだまだはっきりしていない部分が少なくありません。モンゴルやトルコから日本にやって来た騎馬民族が天皇家の先祖だという説もあります。著者も信じがたいと述べる一方、馬具作りの技術などが渡来人によって少なからずもたらされた事例を挙げています。

また著者は、卑弥呼がいた頃の邪馬台国は九州にある(畿内説もある)という説をとっています。江戸時代まで日本の政治の中心は畿内にありましたので、何かしら釈然としない人もいるかもしれません。ただ、本書の地図にある天照大神や素戔嗚尊すさのおのみこと、宗像三神むなかたといった主要な神々を祀った神社が九州を中心とした一帯に分布していることを考えれば、全く有り得ないとも言いきれません。

日本神話もそうですが、古代史は日本史の中でも難解と言える分野です。しかし、本書は地図だけでなく表も用いて『古事記』『日本書紀』の内容比較も分かりやすい形で記しています。日本神話を含めた古代史の内容理解のためにご一読いただければ幸いです。

いながき ひろゆき(司書・情報サービス課)